

3月27日 マルコによる福音書9章2～10節 今日の説教から
説教題：「この世のどんなさらしよりも白く」

今日の聖書箇所でイエス様の姿が変わりましたが、福音書を執筆したマルコは、その輝く姿を「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった」と表現しました。白という色は、「潔白」の色です。どのような罪もそこにはなく、完全に正しい人であるイエス様の姿が、「人間に実現できない色」として現れています。私たち人間がどれだけ頑張っても、生きる上で完全に罪から離れることが出来ないのに対して、イエス様は罪によるたった一つの汚れも存在しないまま十字架への道を歩んでいきました。何の罪もないのに、一切の汚れもないのに十字架につけられたイエス様は、まさに全く汚れのない捧げものの子羊として十字架に捧げられたのです。神様はたった一人の息子を遠い地上に送り、しかも「最愛の息子が十字架にかかるて死ぬ」のためにこの地上に送りました。神様はそれほどまでに、私たちのことを愛してくれているのです。

それでは、私たちはそんな愛を誰かに示すことが出来ているのでしょうか。信仰と希望と愛によって押し出されて、その中でももっとも大いなるものである愛を、私たちは行うことが出来ているのでしょうか。……と言うと少し大きくなってしまいますが、実は私たちは私たちが思っている以上に愛に満たされた生活を送っているのです。私たち日本人はあまり家族に対しても「愛している」とは口にしませんが、ただちょっと電話をかけた時に「ちゃんと食べているか」「元気にやってるか」と声をかけると思います。それこそが私たちの文化、伝統の中で育まれた「愛している」の形なのです。愛とは、相手のために多くのものをつぎ込むことです。お金をかけることもそうですが、相手のこと思いながら時間を使う事も、相手を思うことそのものも愛の一つの形です。神様は時も場所も越えて、私たちと共にいてくれる方です。いつでも、どこにいても、私たち一人一人のことを思い、愛を注いでくれています。私達も、家族のことを、隣人のことを、教会の方々のことを思うその時、確かにそこには愛があるのです。そして、その愛に押し出されて、私たちは多くのことを成し遂げることが出来るのです。

私たちは愛しているのだと、私たちは愛されているのだと、そう感じることが出来る一週間でした。それを知っているからこそ、私たちは近くにいる隣人に愛を注ぐことが出来、そして顔も知らない隣人にも愛を向けることが出来るのだと思います。神様の愛に満たされているその喜びを胸に、今週一週間の歩みを、これから歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：マルコによる福音書 9章 2～10節

- 2:六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

*